

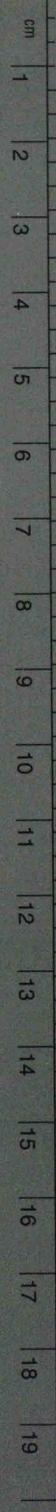
40510

教科書文庫

4
110
41-1928
2000044018

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

**Kodak Color Control Patches**

Blue

Cyan

Green

Yellow

Red

Magenta

White

3/Color

Black

© Kodak, 2007 TM Kodak



版藏館成開京東

新制本教身修學

一卷

著一元原湯

ウイフ マス

教科書文庫
4
110
41-1928
2000044018



資料室

濟定檢省部文

用科身修校學中 日五十二月一年三和昭

教科書文庫

4

110

41-1928

2000044018

375.9
Yu8

制新
本教身修學中

著一元原湯



版藏館成開京東

広島大学図書

2000044018



天祖の神勅

豊華原の千五百秋の瑞穂國はこれ吾が
子孫の王とますべき地なり爾皇孫就て
治らせさきく寶祚の隆えまさんこと天
壤と與に窮なかるべし



勅 語

朕惟フニ我カ皇祖皇宗國ヲ聲ムルコト宏遠ニ德ヲ樹
ツルコト深厚ナリ我カ臣民堯ク忠ニ堯ク孝ニ億兆心
ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟セルハ此レ我カ國體ノ精
華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス爾臣民父母ニ孝
ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ恭儉己レヲ持シ
博愛衆ニ及ホシ學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓發シ
德器ヲ成就シ進テ公益ヲ廣メ世務ヲ開キ常ニ國憲ヲ
重シ國法ニ遵ヒ一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ天
壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ是ノ如キハ獨リ朕カ忠良

ノ臣民タルノミナラス又以テ爾祖先ノ遺風ヲ顯彰ス
ルニ足ラン

斯ノ道ハ實ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ
俱ニ遵守スヘキ所之ヲ古今ニ通シテ謬ラス之ヲ中外
ニ施シテ惇ラス朕爾臣民ト俱ニ拳々服膺シテ成其德
ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ

明治二十三年十月三十日

御名御璽

詔書

朕惟フニ方今人文日ニ就リ月ニ將ミ東西相倚リ彼此
相濟シ以テ其ノ福利ヲ共ニス朕ハ爰ニ益國交ヲ修メ
友義ヲ惇シ列國ト與ニ永ク其ノ慶ニ賴ラムコトヲ期
ス顧ミルニ日進ノ大勢ニ伴ヒ文明ノ惠澤ヲ共ニセム
トスル固ヨリ内國運ノ發展ニ須ツ戰後日尚淺ク庶政
益更張ヲ要ス宜ク上下心ヲ一ニシ忠實業ニ服シ勤儉
産ヲ治メ惟レ信惟レ義醇厚俗ヲ成シ華ヲ去リ實ニ就
キ荒怠相誠メ自彊息マサルヘシ
抑我カ神聖ナル祖宗ノ遺訓ト我カ光輝アル國史ノ成

跡トハ炳トシテ日星ノ如シ寔ニ堯ク恪守シ淬礪ノ誠
ヲ輸サハ國運發展ノ本近ク斯ニ在リ朕ハ方今ノ世局
ニ處シ我カ忠良ナル臣民ノ協翼ニ倚籍シテ維新ノ皇
猷ヲ恢弘シ祖宗ノ威德ヲ對揚セムコトヲ庶幾フ爾臣
民其レ堯ク朕カ旨ヲ體セヨ

御名御璽

明治四十一年十月十三日

内閣總理大臣副署

詔書

朕惟フニ國家興隆ノ本ハ國民精神ノ剛健ニ在リ之ヲ涵養シ之ヲ振作シテ以テ國本ヲ固クセサルヘカラス是ヲ以テ先帝意ヲ教育ニ留メサセラレ國體ニ基キ淵源ニ遡リ皇祖皇宗ノ遺訓ヲ掲ケテ其ノ大綱ヲ昭示シタマヒ後又臣民ニ詔シテ忠實勤儉ヲ勸メ信義ノ訓ヲ申ネテ荒怠ノ誠ヲ垂レタマヘリ是レ皆道徳ヲ尊重シテ國民精神ヲ涵養振作スル所以ノ洪謨ニ非サルナシ爾來趨向一定シテ效果大ニ著レ以テ國家ノ興隆ヲ致セリ朕即位以來夙夜兢々トシテ常ニ紹述ヲ思ヒシニ俄ニ災變ニ遭ヒテ憂悚交至レリ

輓近學術益開ケ人智日ニ進ム然レトモ浮華放縱ノ習漸ク萌シ輕佻詭激ノ風モ亦生ス今ニ及ヒテ時弊ヲ革メスマハ或ハ前緒ヲ失墮セムコトヲ恐ル況ヤ今次ノ災禍甚タ大ニシテ文化ノ紹復國力ノ振興ハ皆國民ノ精神ニ待ツヨヤ是レ實ニ上下協戮振作更張ノ時ナリ振作更張ノ道ハ他ナシ先帝ノ聖訓ニ恪遵シテ其ノ實效ヲ擧クルニ在ルノミ宜ク教育ノ淵源ヲ崇ヒテ智德ノ立進ヲ努メ綱紀ヲ肅正シ風俗ヲ匡勵シ浮華放縱ヲ斥ケテ質實剛健ニ趨キ輕佻詭激ヲ矯メテ醇厚中正ニ歸シ人倫ヲ明ニシテ親和ヲ致シ公德ヲ守リテ秩序ヲ保チ責任ヲ重シ節制ヲ尚ヒ忠孝義勇ノ美ヲ揚ケ博愛

新 制 中 學 修 身 教 本 卷 一	
目 次	
一 新しい氣持で	一
二 立 志	二
三 進んで取れ	五
四 紀律と規則	八
五 友だち	二
六 言 葉	二

新 制 中 學 修 身 教 本 卷 一

目 次

共存ノ誼ヲ篤クシ入りテハ恭儉勤敏業ニ服シ產ヲ治メ出テテハ一己ノ利害ニ偏セシテ力ヲ公益世務ニ竭シ以テ國家ノ興隆ト民族ノ安榮社會ノ福祉トヲ圖ルヘシ朕ハ臣民ノ協翼ニ賴リテ彌國本ヲ固クシ以テ大業ヲ恢弘セムコトヲ冀フ爾臣民其レ之ヲ勉メヨ

御名御璽

攝政名

大正十二年十一月十日

各國務大臣副署

- 七 仕事はそくぎに……………
 八 何事にも熟練……………
 九 忍耐と困難……………
 一〇 失望するな……………
 一一 勉強のしかた……………
 一二 自助……………
 一三 心持を快活に……………
 一四 よく遊べ……………
 一五 競技精神
 一六 身體のきたへ……………
 一七 清潔……………
 一八 衛生……………
 一九 社交……………
 二〇 孝道……………
 二一 兄弟姉妹……………
 二二 國家の恩……………

- 一六 清潔……………
 一七 衛生……………
 一八 社交……………
 一九 孝道……………
 二〇 兄弟姉妹……………
 二一 國家の恩……………
 二二

制新 中學修身教本 卷一

一 新しい氣持で

我等はこゝに新しい學校に入り、新しい先生につき、新しい友だちとともに、これまでより一だん高い教育を受けることとなつた。世には小學校以上の學校に進むとの出來ぬ人の多いことを考へると、我等は身のしあはせを喜ぶとともに、またこのしあはせを與へた父母やこれまでの先生の恩を忘れてはならぬ。

一 老師身仕合せ
喜びと矢文北答
父母や先生恩ヲ
ヒントラ思フ
二 將來立派ナ意
ミヲ申述デシ
シ勵ヨシテ行ク

我等のしあはせ

およそ身のおきどころがかかると、人の氣持もあらたまるものだから、我等もこの新しい學校に入つた以上は、これまで出來なかつたことでも、よく出来るやうに一そく勉強せねばならぬ。

中學校では小學校より學科目も多く、またその種類もちがひ、おひくとその學習もむつかしくなるから、我等はまづこれにたへられるだけの元氣と健康を持たねばならぬ。また、學校の規則や生徒の心得も、小學校のとは多少ちがふから、これもよく知つておくのはいふまでもなく、時々先生からさとされることも、よくこれを守るやうに心がけねばならぬ。

中學校では小學校より一だん高い教育を施すけれども、これもやはり最も修身を大事にする普通教育だから、小學校で善いと教へられたことは、こゝでももちろん善いことであり、悪いと戒められたことは、こゝでも決してはならぬ。だから、各學科目を一様に勉強するのはいふまでもなく、特に心を正しうし、品行をつゝしみ、まづ人として優れたものとなねばならぬ。

先生はこれから永い間、父兄と力を合せ、または父兄に代つて、我等を世話してくださるから、我等はよくその命令を守り、これに對する禮儀を缺かぬのはいふまでもなく、平生心からこれに親みをもち、場合によつては何事も

打明けて、相談もし依頼もするがよい。たまには先生の言葉が自分の氣に入らぬこともあるが、そんな場合には、まづよく自分の身を省みて、からぐしくうらんだりなどしてはならぬ。

我等の卒業はまだ數年後だから、いつも行くさきをたのしんで、元氣にあふれる心をもつて、新に入學した今日の志を中途でくじかぬやうにせねばならぬ。そして、めてたく卒業して、立派な國民として世に立つて、大いに國家のためにつくすことが出来てこそ、我等の今日のしあはせも一時に限らず、一生のしあはせとなるのである。

今日の志を全
うせよ
明治天皇御製
物學ぶ道に立
つ子よおこた立
仇はなん
しと知るる

二 立 志

立志の必要

立志トハ
目的ヲ定メ
達シヨウトス
必ズ之ヲ
ル決心

およそ學問を始めるに當つて、最も大切なことは立志である。立志とは將來の目的を定め、その上、必ずこれを達しようと決心することである。人を舟にたとへると、立志はその錨であつて、人をして世上の風波にたへさせるし、またその舵であつて、人に行くさきの方角を示すものである。心が定まらずにたえず動いてゐては、どんなにたやすい仕事でも、満足になしひげられるものではない。昔からえらい人はたいてい早くから志を立てて将来の成功を期したものである。賴山陽などはすでに十二歳の時に、「男兒學ばざればすなはちやむ。學ばばまさ

賴山陽

五 摘ニ支支
七心モ極ニモ
殢リ有リえ時
ハ何事モ上達セバストテモ天下ノ大家傑トナルコトハ勝ハヌモノニテ俟

稚心を去れ

橋本左内

に群をこゆべし。」といつて、早くから奮發したからこそ、あ
のやうな名高い學者になつたのである。
だから、中學生は中學生らしく快活に無邪氣であるの
はよいが、いつまでも子供じみた心があつては、志を立て
ることができぬ。名高い勤王家の橋本左内は、十五歳の
時に、「稚心ちを去れ。」といふ一文を書いて、自分で自分を戒め
た。稚心とは子供じみた心のことである。さすがに壯
年ですでにその名を世間に知られ、二十六歳で國のため
に命をすてたほどの人物の心がけは、青年の頃からちが
つたものである。

しかし、立志には大きいものと小さいものがある。他

日萬人に優れた人物になつて、世のため國のためにつく
さうと決心するのは大きい立志である。これはもとよ
り大切なことだが、これとともに、小さい立志もまた必要
である。たとへば、我等が學校に入つてよい生徒になら
うと決心するのは小さい立志だけれども、よい生徒であ
ればこそ、首尾よく學校を卒業することもできるのであ
る。そして、必ず首尾よく學校を卒業しようと決心する
のもまた小さい立志だが、首尾よく學校を卒業すること
ができればこそ、他日社會に出ても何かの役に立つので
ある。古語に、「高きに登るには必ず卑ひきよりす。」とあるや
うに、初から高いところばかりをのぞんで、足もとに氣を

つけないと、つまづくことをまぬかれぬ。我等は遠大な望をいだくとともに、さしあたり卑近な目的を達することを怠つてはならぬ。

三 進んで取れ

一、課業ヲ受ケ
ル心得
教育は心で取
れ

二、教場ナル
ウトスル覺悟
コト
教育は心で取
れ

口先生教授
ツツキ

ニ匡意シ
得ミテ行ク

教育は通常これを受けるといふけれども、たゞ受けるだけでは十分でない。自分から進んでこれを取つてこそ、始めて大いにその効果があらはれるものである。そして、こゝにいふ取るとは、單に目と耳で取るばかりではなく、特に心で取ることをいふ。先生の膳立はどんなにりつぱでも、生徒に箸はしをとる心がないと、せつかくの膳立

もむだになる。箸をとつて食べるものは生徒で、先生はたゞこれを食べるやうにしむけるまでである。世にはよい學校で學びながら、案外その學業の進まぬものがあるが、これは多くはその人に自分から進んで教育を取る心がないからである。だから、古人の語にも、「古の學者は聽くに耳をもつてしたけれども、受けるには意をもつてしたので、得るところが多かつた。」とある。

學業は品物のやうに、金で買ふことも、また勝手に譲り受けることもできぬ。たゞ心からこれを得ようどこひねがふ人であつて、始めてこれを得ることができるものである。たゞ優れた先生についてよい教育を受けさせ

三、歸宅シバ
学業は品物と
ちがふ
二、歸路
今日の習得
ミタコト
ヤルコト
ハ先づ手筋
ツクノ筋料ヲ
通讀ル
口休憩後持
マリモ斜ハ
後習スルコト
念ナレテ

八、教場から出
ル時ハ何コ
ヲ考ヘテ見ル
ニ、判ラヌ莫
賀問スルト
ハ、歸宅シバ
学業は品物と
ちがふ
頭想ニ浮
王安石(宋の
學者の語)

縁り込スコ トヲ志レテ

ハナラヌ。

二而後明ノ豫習ヲ
叮寧ニスルコト

解け、そして

したら、學業は自然に進歩すると思ふのはまちがひで、またおよそ自分の力で得たものは、たゞ單に他から授けられたものよりも、一そうたしかに我が物になるやうに、學業もまた自分の力で得たものであつてこそ、よく頭にしみこんで、その上、その應用も自在にできて、實際の役に立つものである。

自分から進んで教育を取らうとすると、必ず種々の疑問が生ずるばかりでなく、またこの疑問を解かうとする努力もおこる。教へられた事がらについてわからぬことがあつたら、ゑんりょなく質問し、またたとひ教へられぬことでも、疑があつたら自分でこれを解いて見ようと

日々の課業に
對する注意

出づる時は爲
すべきことを爲
思ひ歸る時
は爲したるこ
とを思へ。
（西謙）

つとめる生徒は、その學業も必ず進歩するものである。

我等は毎日前もつてその課業について考へ、必ずこれを取つて我が物にしようとするかくごで教場に入らねばならぬ。教場では一心ふらんに先生の教授に注意して、あくまでもこれを會得しようとつとめ、また教場を出る時には、その時間には何を得たかと考へて見ることが大切である。こんなにして常に念を入れて學業を勵むと、こゝに我等は始めてよく教育を取つて我が物にし、その上、その利益をも十分に受けることができる。

四 紀律と規則

何事をするのにも、順序を考へてきまりを正しくしないと、仕事がはからず、成績がよくない。たゞへば、本は本、鉛筆は鉛筆と、ちやんとその置くべきところに置かないと、勉強中にうろたへる。だらしのない人はその學業も進まず、その上、人がらがいやしく見えて、人にはばかりされる。このきまりを紀律といふ。

學校は多數の人を集めて、いつしよにこれを教育する所であるが、その教育がうまく行はれるのには、まづその多數の人の行動にきまりをつけねばならぬ。たゞ一人でも遅刻して教場に入ると、それだけ授業は妨げられる。まして數人が互に私語したりいたづらをしたりすると、

全級の生徒はその注意をみだされて、覚えられることまでも覚えられぬやうになる。だから、學校で紀律をやかましくいふのは、つまりはすべての生徒に落ちついて教育を受けさせ、また進んでこれを取らせるためである。學校の規則の中の生徒心得は、おもに生徒に紀律を正しうさせるために定めたものだから、我等は喜んでこれに従はねばならぬ。ところが、わがまゝをしたいものは、これをたゞきゆうくつなものとばかり思つていやがるけれども、こんな人でもちよつと規則のない場合を考へて見ると、すぐその必要なわけがわからう。もし學校に規則がなかつたら、我等は毎日何時に學校へいつて、どの

二、落休子勤務略	② 生徒の復讐 ナラカ	校則ハ瓦窓 ナラカ	学校の規則 ヨ守ライバ
考ハラルが然ラ エニヨリテ解タ バヌニヨツフ至 モノデヲル	スエヨ守レ イ便利モア 徒公金スレ	ウタク 窓ノ様ニ スエヨ守レ	
一、校則全徒 モノコカル	行動 キ	ナラカ	

五、美シイ校ト
六、他日社會ニ
ヨイ準備

ラソナヘ
立ツタ時
ニモナレ、

社會の規則と
學校の規則

教室に入らねばならぬかさへも知ることができぬ。各自思ひくに出入りしたら、そのこんざつのため、お互のめいわくはこの上あるまい。どの學校にも必ず規則が定めてあるのはこれがためである。生徒がよくその規則を守ると、その學校は生徒の行儀も正しく、また美しい校風をそなへるものである。

社會にもまた學校と同じく、その規則として法律・習慣・禮儀などがある。しかも社會の規則は學校のそれよりも一そう複雑・厳格で、これをおかすものは、世の非難を受けるばかりではなく、重く罰せられることさへある。だから、學校で規則を守る習慣を養ふのは、他日社會に立つ

時のよい準備にもなる。學校で規則を守る習慣を十分に養はなかつたために、社會に出た後、たとひ法律上の罪人とならぬまでも、わがまゝものぶさはふものとして、世間からいみきらはれるものが少くない。

しかし、生徒心得などはつまり生徒の紀律を正しうするためのものであるから、いや／＼ながらでも表面だけこれに従つてさへ居ればよいといふものではない。實は小學校でひとつほり生徒として心得るべきことを習つて來た我等は、別に生徒心得がなくても、自分ひとりの考で紀律の正しい行をせねばならぬのである。我等は自分から進んで紀律を守るよい習慣を作つて、いつも生

自ら進んで紀
律を守れ

徒心得の精神に適つた行をすることのできる生徒になりたいものである。

五 友だち

に學友とは
一様
交れ

友だちにはえらんで交るべきものもあるが、またえり好みをせずに交らねばならぬものもある。學校では、友だちとすべき人はすでにきまつてゐるから、すききらひをいふことはできぬ。もちろん多くの人の集りだから、その性質や行もまちくであつて、ことぐく自分の意にかなふ人ばかりではない。しかし、これがためにかへつて長短相おぎなふ利益もある。中にはよくない行を

ふ長短相
おぎな

するものもあらうが、こんな場合には、「ことわざ諺にいふ「人のふり見て我がふりなほせ」の心がけさへあると、自分の害にばかりはならぬものである。

廣く誰とでも交つたり、たゞ自分のすきな人とだけ交つたりするのは、ともに弊がある。ところが、學校の生徒は多數であるが、さう悪いものはないから、なるたけこれと一様に交るがよい。

西洋の諺にも、「友は互の鏡」とあるとほり、よい心がけはよい友だちを作り、悪い心がけは悪い友だちを作る。自分が友だちに親切にすると、友だちもまた自分に親切にする。友だちが自分に對して不親切なのは、必ず自分が

づ濫交らんかうと偏交へんかう
しめ

善惡の友
一だち
では心がけ
る

友だちに對する不親切のむくいである。だから、よい友だちを得ようと思ふなら、まづ自分の心がけをよくし、友だちが自分に不親切であるのを責める前に、まづ自分が友だちに親切であるか否かを省みるがよい。

友だちもまた
獨立の人

友だちと交るについて特に心得るべきことは、人もまた自分と同じく、その好むところに従つて、その行ひたいことを行はうとするものだといふことである。もし自分は人を我が意のやうにしようと思ひ、人もまた自分に對して同じ考をおこしたら、相手の求に應ずることができぬから、初め親しかつた交も遂にはうとくなる外はない。だから、友だちに對してはあまり多くを求めずに、古

淡泊な交
たんぱくなゆう

禮記にある語

利益を心の上の
うけよ

語に、「君子の交は淡きこと水の如し。」とあるとほり、なるたけあつさりと交るがよい。

從つて我等は友だちからはたゞ心の上の利益だけを待ちまうけるべきである。互に慰めあひ勵ましあつて、共に善い人にならうとするのが友だちの道である。いかに親切をつくし、あはねばならぬからといつても、金錢上の助までするには及ばぬ。こんなことはすでに世に獨立してゐる成人の交際ですることで、我等のやうにまだ父兄のせわになつてゐるもの、せねばならぬことではない。學校で生徒同志の金錢の貸し借りを禁ずるのは、おもにこんなわけからである。

友だちの道の根本心得ともいふべきは、互に信を重んずることである。教育に關する勅語に「朋友相信シ」と仰せられたのはすなはちこのことを教へたまうたのである。信とは心に誠があり言に偽のないことで、言に偽がないとは、言行が一致して、しかもそれが正しいことである。信は何事にも必要だけれども、とりわけ友だちの交に必要である。「朋友相信シ」の聖旨を今から堅く守つてゆくと、在校中はいふまでもなく、他日世の中に出でからも、いたるところでよい友だちを得て、一生を愉快にまた心強く送ることができることである。

思考

考案

感覚

目から

五官

理解

二、さやかに

(元陽)

三音聲

(口大キ角)

六 言葉

言葉は人が自然に覚えるものだけれども、その用ひ方に注意しないと、その効用を全うすることができぬ。『言葉の用は考や感じを外にあらはして、これを交換することだから、第一の要件はその意味が誰にでもはつきりとよく通じることである。そのためには、まづいはうとすることを十分に理解しなほその上にこれをさわやかにいひあらはすことができねばならぬ。あいまいとぐづぐづとは言葉の値うちを減ずる。また音聲のにごつたのもよい言葉とはいへぬ。だから、言葉に上達するのには、言葉を習ふことと頭を練ることとが必ず並び行はれ

一、言葉の悪用

（はなをひき

答は二頁の

三行目 言葉

要はがう文換

するこたま

二、言葉の第

一要件とすな

答二頁の行

かう三頁三行

言ハントスル事

タキソト誰

ジルコト

老ツ言ハント

元事ヲ十分ニ

自ラ理解シ

葉悪用される言

ソ意味か
デモヨク通

の言葉は心のも

る必要がある。頭を練ることをゆるかせにして、たゞ言葉だけを上手につかはうとすると、往々口さきばかりの人となつてしまふ。

言葉の悪用の最も普通なのは虚言だらう。虚言の悪いことは誰でも知つてゐながら、その中に悪意のない世辭のやうなものもあるので、人はどうかするとこれを深くはとがめぬことがある。しかし、こんな世辭でも虚言には相違ないから、日常の交際などでも、あまりそらくしいうことをいつてはならぬ。これが習慣になると、いつの間にかその心までも軽薄になつて、人から信用されぬやうになる。要するに、言葉は心のものであつて口のも

のではないと常にかくごして、どんな場合にでも、心になることは一さいはぬやうにせねばならぬ。

言葉は直接人に對して用ひるものだから、特に人の感情を害せぬやうに注意する必要がある。目上の人に對しては、同輩に對するよりも、ていねいな言葉を用ひるのはいふまでもなく、すべて荒いいやしい言葉を戒め、その上、落ちついて、順序正しく、よく要領を得るやうに話し、方言などは特に學校時代になほしてしまふがよい。また言葉は人の心の直接のあらはれで、一言一句でその人となりの一端がうかゞはれるから、しひて言葉をかざるのによくないが、前後の考もなく口にまかせて多言すると、

サカタカニ語
又ミラセホニテ
言葉ト、ヨロ
えニ屋裏
スルヲ
三ヨリ葉ノ裏
虚言ニテ語
兩舌縛語
惡口

賢者の口は心
ある。（アロモン、
イスラエル
國王）

四人慈情高
々又様ニスル六
如何ナル良言
竟不りて方

輕口の戒

いたづらに自分の愚をあらはすばかりではなく、また聞く人にも不快な感じをあたへる。「口^あいて腸^{はらわた}見る淺^{あさ}蜊^リかな。」といふ古人の句は、こんな人にはよい戒である。思ふだけでいへぬのもよくないが、思ふ以上いへるのもまたよくない。身のあやまちはこんな場合に多くおこるものである。言葉は心から口を通して出るものだけれども、時として口からすぐに出るかと思はれるほど言葉が言葉をさそひ出し、知らず識らずおしゃべりをして、過言を後悔することがある。こんなことから、むかしから、どこの國でも、言葉の多いよりも、かへつてその少いのをよいとして、孔子などは、「君子は言に訥^{とつ}にして、行に敏^{びん}」能辯・雄辯であることもまた必要である。

必能辯 雄辯も
必要辯 雄辯も

ならんことを欲す。」といつてゐるけれども、十分なことを望むなら、我等は言にも行にもともに敏であるのがよい。とりわけ今日は多數の人を相手にする場合が多いから、能辯・雄辯であることもまた必要である。

七 仕事はそくざに

およそ大きな仕事は小さな仕事の集めつまれたもので、世のいはゆる大事業は決して一時にできあがつたのではなく、たえず小さな成功につとめ、その小さな成功を集め、しまひにそれを大きな成功にしたのである。だから、何か大事業をなすほどの人は、大きな事だけに

時を大切に

小を集めて大
をなす

時は大なる發
(西諺)

心を用ひるのではなく、小さな事にもよく注意し、しかもちやくくと仕事をかたつけて、今日なさねばならぬことを明日にのばすやうなことがない。光陰はまことに矢のやうで、ひとたび去るともう取りかへすわけにはゆかぬから、たとひ一日の怠^{おこたり}でも、我等の一生の幾分をむだにして、それだけ損になるものである。昔から、えらい人が寸陰をもしんだといふのは、まことにもつともなことで、その成功はおもにこの心がけの賜^{たまもの}である。西洋の諺では「時は金。」といふが、時は單に金であるばかりではなく、すべての仕事は時の力によつて始めてなしとげられるものである。知識でも、道徳でも、これを我が物にする

のには時がかゝるから、我等はあくまでもよく時を利用して、一分一秒でもむだにしてはならぬ。

我等のなきねばならぬ仕事は數かぎりがなく、今日は今日の仕事があるやうに、明日はまた明日の仕事があるから、我等は日々の食事は必ずその時^くに取つて、これを翌日にのばさぬやうに、日々の仕事もまたその日^くにかたつてしまはねばならぬ。さうでないと、我等の一生の成功もまたそれだけおくれる。

我等の平生の生活について見ても、遅刻・缺課・缺席もせず、その上、豫習・復習を怠らず、その日の課業を十分果して後に寝床に入ると、安心して眠られるけれども、これを怠

仕事の延期は

今日の後に今
(西諺)

仕事はそくざに
背負ひきれぬ

つて、いゝかげんにしておくと、それが氣にかゝつて、心持
がよくない。そして、翌日になるとまた翌日の仕事があ
るから、一日に二日分の仕事はできず、その幾分をまたそ
の翌日にくりこさねばならぬやうになつて、荷物は日一
日とその重さをますばかりである。かうして試験まぎ
はなどになると、遂に背負ひきれなくなつて、そのため大
いに苦しまねばならぬ。

だから、我等は、「今日ばかりが日ではない、明日の日もあ
る。」といふのはなまけもののこととして、現在を最善の時
と見て學校の課業ばかりでなく、何事でもおよそせねば
ならぬことは、時を移さずそくざにするやうに心がける

し日暮れて道遠
云。今日ば、(西謙)
在最善の時は現
豪合衆國の文カリ

べきである。支那の昔の諺に、「日暮れて道遠し。」といふの
がある。これは、旅人が晝の中に歩くだけ歩かなかつた
ので、晩になつてその行手のはるかなのに氣をあせるの
を、人の一生にたとへたもので、世上にはこの嘆を發して
ゐるもののが少くない。我等の宜しくかんがみるべきこ
とである。

八 何事にも熟練

およそ學問・技藝はまづこれを理解してからさらには應
用して見ないと、實用に役だたぬ。とりわけ道徳はさう
である。そして、應用には熟練が先だたねばならぬ。一

理解
から應用
には熟練

度、學んだことでも、何度もくりかへさないと、完全に我が物にはならぬ。このことはいろくの技藝を見るとよくわかる。たとへば、水泳でも、たゞその形だけを覚えて、別に實地の熟練^レをせずに水に入ると、必ずおぼれる。こんなものを諺に、「畠水練^{はたけすろん}」といつて、世の熟練をからんずる人を戒めてゐる。

學理もまたこれと同じで、たとへば、數學の公式などでも、實際多くの問題にあてはめて、ためして見ないと、それが果して動かぬ眞理だといふ確信は得られぬ。

修身上の教訓などは、とりわけさうであつて、たゞこれを口にとなへるだけでは、いはゆる空念佛^{そらねんぶつ}で、身のためにな

は少しもならぬ。もとより道徳には技術に似たところがある。畫^ゑの講釋はどんなに上手でも、畫が下手なら畫家とはいはれぬやうに、口先ではどんなにうまく忠孝の道を説いても、これを實行しないと、決して忠臣孝子とはいはれぬ。これに反して、口には多くはないでも、身にその道を行ふものは、これを德行家といつてよい。だから、孔子も道徳についてはとりわけその實行を重んじて、「父母に事^{つか}へてよくその力を竭^{つく}し、君に事へてよくその身を致し、朋友と交つて言に信あらば、未だ學ばずといふといへども、吾は必ずこれを學びたりといはん」と教へたのである。修身上の教訓が思ふとほりに實行されるやう

理解
取行

慣行
貫行

八 何事にも熟練

三

になるのには、たゞ道徳についての考が明かであるだけでは足らぬ。まづ何度も實行をくりかへして見ねばならぬ。

さらに一例を擧げると、虚言が惡徳であるとは誰も知つてゐるけれども、實際はどんな場合にも、その心に信ずるところを少しもまげずにいふことは、初の間はむつかしいものである。しかし、一度その困難に打ちかつと、度數を重ねる中には次第に習慣となつて、しまひには別に心を勞しないでも、自然に自分の信ずるところを有りのまゝにいふことができるやうになる。

熟練と効果

虚言せぬ練習

我等が日常やすくと不用意につかつてゐる言葉で

も、實は何百回何千回とくりかへして始めて覚えたもので、熟練の結果、技術がどれほどまでたくみになるものであるかは、あの名人・大家の奏する音樂を聞き、または老練な手品師の手品などを見るとよくわかる。ふだん修養に心がけるものが、こんなものを見たら必ず自分の知徳もあれほどに熟練させたいものだと思ふだらう。

修身上の教訓をくりかへして聽かされるのはよくないが、その實行のくりかへしは多いほどよい。我等は、道徳的知識の缺乏よりも、熟練の不足のために、十分に道徳を實行することのできぬ場合が多い。行はねばならぬと知つてゐながら行ふことができぬのは、全く熟練を缺

實行の反復

練習は師匠を
(西謙)

八 何事にも熟練

三

くからである。だから、たとへば、自分は人おぢをするため、人と談話する時に話しあぶると知つたら、なるたけ人前に出ることをつとめて、そのくせをなほすやうに心がけるがよい。かうして熟練すると、自分の短所もおひおひ補はれて、あまり困難を感じずに思ふことを実行することができるやうになる。初は演壇に立往生した下手な演説家でも、場数をかさねると、度胸がすわつて上手になるのはその一例である。

成功には忍耐

九 忍耐と困難

忍耐とは困難にあつてもめつたに初の志をかへぬこ

とをいふ。何事にも多少の困難を伴ふものだから、忍耐なしには學問でも事業でも成功するものではない。一度試みてできぬことでも、さらにいく度もこれを試みて、必ずその志を達しようとするだけの忍耐がなければならぬ。

生れつき天才を具へてゐる人でも、忍耐して勉強しないと、その天才を全うすることができぬ。天才といはれる人の一生を見ると、その事業はたゞ天才を頼んででかしたのではなく、多くは人一倍勉強した結果である。賴山陽は歴史・詩文・書畫にも兼ね通じた大天才だつたが、山陽自身は、我を天才といふものは、未だ我を知らざるもの

憂きことの上に積な
ある身の力たり
(熊澤蕃山)

天才の完成と
忍耐

賴山陽

今一息が大切

最後の一撃で
釘はしのつ
と打込まれる
(マーティン、
アメリカ合衆國の著述家)

なり。我を刻苦するものといふものは、我を知るものなり。」といつた。山陽は實によく刻苦したもので、死ぬまぎはまでも筆をとつて著書を完成したほど始終根氣よく勉強したので、あれほどの偉い人物にもなれたのである。生れつき平凡な人でも、よく困難にたへて、つとめて怠らないと、遂にはその目的を達することが出来る。ところが、世には最初の中はせつせと勉強しながら、今一息といふところで急にくじけるものが多い。これはみな忍耐の力が足らぬからである。ナポレオン一世の言に、「戦争に最も大切なのは最後の十五分間である。」とあるが、この心がけは必ずしも戦争に限つたことではなく、どんな

事業にも必要で、恐らく人と人の競争は何でもこれで勝負のつかぬものはあるまい。

處世と忍耐

「僕の一字を忘れるな

世の中は何事も意のまゝにならぬのが常で、我等の狭い交際にあると、時としてはわけもないのに人に疑はれたり、にくまれたり、悪口されたりすることがあるから、人と交るのにはとりわけ忍耐が必要で、そして、この場合に最も大切なことは、「僕」の一字を忘れぬことである。一時は殘念口をしいと思ふことでも、よくしんばうして時を俟つと、敵を作らずにすむばかりではなく、あべこべに敵をしてその非をさとらせることさへできる。

我等が通常困難と感ずることは、ほんたうに困難であ

外から来る困

るよりも、困難だらうと想像することの方が多い。従つて「案じるより産むが易い」といふ諺のとほり、實際その事に當つて見ると、堪へがたいほどの困難はそんなに多いものではない。また、一方から見ると、人に困難を感じさせるものは、特にこの頃の青年にいちじるしい享樂もうやうらくの風だから、初から人の一生は苦樂相半ばして、樂は苦の中にあるものだとかくごしてみると、いはゆる困難もさう困難には感じないやうになるものである。

このやうに考へると、忍耐とは外から来る困難に堪へることではなくて、内にある安逸の欲望などを抑へることであるやうだが、さうばかりとも限らぬ。やはり外か

ら来る困難もなかく少くない。不慮の災難や失敗や病氣その他すべて仕事に伴ふいろいろの困難もあるから、これに對してもつとめて抵抗せねばならぬ。しかし外から来る困難は常住不斷じやうちよふたんのものではなくて、ちやうど荒波のやうに、時々寄せては來るが、やがてまた引きかへすものである。忍耐はこの荒波の寄せて來る際に特に最も必要である。前に今一息のところといつたのは、こんな場合を指すのだが、これを切りぬけてこそ始めて何事も成功するものである。

一〇 失望するな

一〇 失望するな

困難は荒波

人には生れつき才不才があつて、學校の成績も一様ではないが、古語にも、「駑馬とも十駕すれば千里を致すべし。」とあるやうに、努力して怠らないと、相當に進歩するものである。學業の成績のよくないのは、生れつきにもよるけれども、多くは勉強の足らぬのに原因する。しかしながら、力を落すな

時には最初不成績だつたために、力を落して學習の樂みを失ふのによることもある。こんな場合でも、さらに奮發して一度よい成績をとると、新に自信が生じて、その後は學業の進歩がはかゞしくなるものである。

自分の長所を知ることはたやすいやうで、その實はなかなかむつかしいものである。自分の長所は語學だと

思つてゐる人が、理科の才をもつてゐたり、自分は數學が得意だと思つてゐる人が、音樂の天才だつたりすることは珍しくない。「下手の横好き」といふ諺のとほり、好きな學科が必ずしも長所ではなく、嫌ひな學科が必ずしも短所ではない。だから、一時成績がよかつたからといつて安心してはならぬし、また悪かつたからといつて落膽するにも及ばぬ。學校では各學科を一様に修めて、自分の好きなものに偏しないのがよい。かうして勉強してゐる中には、おひく自分のほんたうの長所がわかつて來るものである。西洋ではこれを自己發見などといつて、やはりすぐにはわからぬものと見てゐる。

一〇 失望するな

四三

嫌ひな學科でも、勉強のしかたさへよいと、好きにもり、相當の成績も得られるものである。もし或學科の成績がよくなかつたら、その原因が何であるかを考へて見るがよい。必ず思ひあたることがあるものである。もしそれが自分の不勉強によつたのなら、心をとりなほして大いに勉強するがよい。もしその學科を理解するのに必要な準備が十分でないのによつたのなら、改めてその準備をするがよい。もしまだ病氣によつたのなら、早く丈夫になつて追ひつくがよい。數學などの不成績は、多くは最初に十分理解することができなかつたのが、後までもわづらひをするからである。こんなによく注意

して不成績の原因をのぞきると、たとひ生れつき不才の人でも、必ず人なみの成績はとることができるものである。

學業の進歩の有様は人によつてまちくである。或是初に早く後に遅いものもあり、或は初に遅く後に早いものもある。小學校の神童が中學校の凡才となり、中學校の凡才が大學の秀才となることもある。また學校で成績の劣等だつたものが、社會に出てから大きな事業をすることもある。古語に「大器は晩成す」といふのはこのことである。まれには早熟して大成するものもあるが、普通には早熟するものは大成しない。そして、大成のお

もな原因は不斷の努力である。だから、自分で努力することができると信ずるものは、決して失望するには及ばぬ。まして我等はみな何かの長所をもつてゐるから、努力して怠らないと、次第にこれを伸ばして、必ず相當の人物になれるものである。

人は希望をもつてゐるからこそ生きてゐられるのである。失望すると半ば死んだやうなもので、絶望すると全く死んだも同様である。だから、學業に限らず、何事についても希望をしてぬやうにせねばならぬ。一度の失敗で再舉の勇氣を失ふやうでは、何事をしても成功するものではない。希望は人の行手を照らす燈明臺である。

我等はたえずこれを見つめて見失はぬやうにせねばならぬ。

一一 勉強のしかた

勉強を有効にするには、よくそのしかたを考へねばならぬ。朝から晩まで机により書物に向つても、かくべつ學業の進歩せぬものがある。それはたゞ眼だけ使つて頭を動かせぬからである。こんな勉強はえせ勉強で、何の役にも立たぬ。それよりも外に出て運動でもする方がましである。

勉強は順序正しくすべきである。學校に時間割があ

勉強と細心

るやうに、復習・豫習も一定の順序によつてしないと、たしかな知識は得られぬ。あまりせきこんで書物を讀んだり問題を考へたりするのは、ちやうど早く火をおこさうとして、むやみに薪や炭をくべるやうなもので、いたづらに頭を混亂させるばかりで、かへつて目的を達する妨となる。だから、我等は机に向ふ前に、まづどういふ順序で勉強するかを前もつて考へて見る必要がある。

また勉強に際しては、頭の効を最も精密にせねばならぬ。學問に最も大切なことは、徹底するといふことだから、些細なことだからといつて注意を怠らぬやうにせねばならぬ。かすかな疵が玉の値うちを損ずるやうに、少

しの間違が知識の全體を無にすることがある。文章を作つても、たとひ一字でも一句でも誤ると、決して完全な文章とはならぬ。數學などでは、たゞ一つの數をちがへても、その計算は全く間違になる。その他、理科の實驗などでも知られるやうに、極めて細かい點を最も精確に研究して、それで始めて知識が確實にされるから、おほざつぱといふことは學問上では第一の禁物である。

また勉強は楽しんでするがよい。心配しながらしたり、いやくながらしたりしては、その成績が悪いばかりではなく、どうかすると心身の健康をも害するやうになる。前に述べたやうに、順序を立てて着々と進むと、そ

間に自然に自信が生じて、學業に對する興味もおこるものである。その他、勉強につかれたら、運動をして元氣を回復し、一つの學科にうんだら、他の學科に移つて氣分をかへることなども、また樂しんで勉強するのに必要な方法である。

二二 自助

西洋人と自助

人はなるべく早くから、自分でできることは、人手を借りず、自分の力でする習慣を養はねばならぬ。西洋では、昔から「自助・自立・これ男子」と教へて來てゐるから、その國民は概して自助の精神に富んでゐる。西洋の子

供のしつけ方を見ると、たとへば、子供が倒れると、我が國なら母親がかけていつてたすけ起すところを、西洋では子供が自分で起き上るのをまつといふ風である。その他、萬事この流儀で教育するから、一般に幼少の時から、自分の事は自分でする習慣がよく養はれてゐる。

ところが、我が國民はとかく他に依頼するくせがあつて、自分でたやすくできる事までも、母親をわづらはしたり、女中を使つたりしがちである。子供の時からこんな悪い習慣がついてゐては、成人しても自然獨立自治の氣象に乏しい人になり、そして、一旦人の助が得られぬ場合にでもなると、たちまち當惑して、どうすることもできず、

依頼の惡癖

社会の進歩と
人手の不足

人一倍身の不幸をなげかねばならぬやうになる。

およそ人手は社會の進歩につれてだんく不足を告げるものだが、我が國でも近來その傾かたむきがいちじるしく見えて來た。だから、行くくはどの家庭でもなるたけ使用人の數をへらさねばならぬ。たとひ人手のあまつてゐる場合でも、これをたゞ自分一身の便宜のために使用者のは、人の人としての貴さを知らぬものである。西洋の文明國では、どんな富貴な家の人も、必要もない供のものなどを引きつれて歩くやうなことはめつたにない。この點から考へても、我等はなるだけ人手を借りりずにするやうに、今からよくその習慣を養はねばならぬ。

が自分の靴をみ
がく大統領

昔、アメリカ合衆國の大統領リンカーンが旅館に泊つて、自分の靴くつをみがいてゐるのを見た人が、彼に向つて、「あなたの身分で自分の靴までみがくとは、どうしたのです。」といふと、リンカーンは「では、誰の靴をみがかねばなりませんか」と逆に問うたといふ話がある。大統領の意は、自分の靴をみがかねぐらる人は、やがて他人の靴をみがかねばならぬやうなものになると諷うしたのである。まことにそのとおりで、世間には、初にあまり人を使つた報として、後には人に使はれる身分に落ちぶれた例も少くない。

我等は、日々の學用品はいふまでもなく、衣服・持物もよ

自分で始末せ

休憩中二教室
ニラレトドンコトカアルカ
一不規則 僕わ
六身體カラダの習慣ラヤバル

四教室内のキバツラコワシ又ハ教室内ヲキツツケヨアス六生徒ヲタガヒ、胸肩吊ソノタノギジム所ヲフヰテシル

一二 自助

オソレガアル

く自分で整理して、登校にさしつかへのないやうに準備し、また室内の掃除や夜具などの始末も、一さい自分でするがよい。その他、學業についても、自分で考へてできることは、なるたけ先生にたよらずに、自分で試みる習慣を早くから作ることが必要である。人手はいつでも借りられると思つてはならぬ。どんな人でも、必ずいつかどこかで、自分のことは自分一人でせねばならぬ場合があるものである。そして、これができてこそ始めて一人前の人といはれるのである。

一三 心持を快活に

同じ青年にも、陽氣なものもあれば陰氣なものもある。陰氣なものはその日々面白くなく送るから、これほど損なことはない。こんな氣分はおもにその人の生れつきによるけれども、またその身體のぐあひなどから起るものである。身體の丈夫な人が活潑に運動し元氣よく遊ぶところには、陰氣は光をおそれる惡魔のやうに、決して近寄つて来るものではない。陰氣の惡魔はおもに身體が弱つて神經が過敏になつてゐるそのすきに乗ずるものだから、こんな場合には、つとめて身體を健康にし、その氣分を持ちなほすがよい。心にやましいところがなく、常に氣分が晴れぐとしてゐる人には、世間はいつ

よく笑へ

善心は最後まで微笑してね
(エマーソン)

も陽氣に、人間は誰も善い人に見えるものだから、こんな
人こそまことにしあはせものだといつてよからう。

イギリスの少年團心得に、「よく笑へ」といふ一箇條があ
る。しかし、たゞ笑ふことがたゞちに快活の心持をあら
はすものだとはいへぬ。あまりによく笑ふ人は、同時に
またあまりによく泣く人でもある。「ほんたうに快活な
人は、感情がいつも平かで、たとひ口を開いて笑はないで
も、心に陽氣がみちてゐるから、それがその人のすべての
舉動にもあらはれて、何となく人に好かれるものである。
ところが、陰氣な人は、自分が人を嫌ふやうに、自分もまた
人から嫌はれるので、こんな人はどこにでも敵をもつて

るるやうなもので、まことに氣の毒である。

青年は人間一生の花時だから、この時期をできるだけ
快活無邪氣に過してこそ、やがてりつぱな實が結ばれる
わけである。我が國の諺に、「笑ふ門には福来る。」といふの
も、またこゝに説いた意味に外ならぬ。

一四 よく遊べ

競技精神

遊は人の心持を新にし、その元氣を養ふものだから、と
りわけ青年には缺くことができぬ。しかし、よく遊ぶこ
とはなか／＼容易ではない。昔から、勉強のしかたにつ

いてはいろいろ工夫されてゐるが、遊ぶ方法についてはあまり考へられてゐない。これは、遊は勉強ほど大切でないと考へたからでもあらうが、また勉強が人の行を引きしめるのに反して、遊はとかく自由を主とするところから、その方法を定めることができむつかしいからでもあらう。西洋人はよく働きよく遊ぶといふが、それは、たゞ彼ら等が勉強もするが、また運動なども怠らぬといふばかりではなく、その遊び方がよく遊の目的にかなつてゐるといふ意味である。

よく遊ぶのにはどうしたらよいか。第一に、遊ぶ時には心から遊ばねばならぬ。心から遊ぶとは、餘念なく無

邪氣に遊ぶことである。遊ぶ時に、勉強のことを考へたり、その外何事かを気にかけたりしてゐては、遊んでも心持を新にし、またさわやかにすることがきぬ。第二に、遊びすごしてはならぬ。面白いといふので遊にふけると、あまり感情が高ぶりすぎて、後にはかへつて不快を覺えるやうになる。第三に、遊は飲食を主としてはならぬ。單に口腹の慾だけをみたすのは、ほんたうの遊ではない。こんな遊はどうかするとかへつて健康を害する。第四に、遊はなるたけ戸外でするがよい。近來は運動競技もなかく、盛になつて來たが、まだ青年にさへ室内にこもつてゐたがる風がある。カルタ遊などは、用のない時に、

ラスキン(イ)
ギリスの文豪
の語

たゞたいくつしのぎにするだけにとゞめ、碁・将棋などは、青年の時にはこれを禁ずるがよい。郊外を散歩して、清い空氣を吸ひ、自然の風光に親しむなどは、誰にでもできる最もよい遊び方である。西洋の或學者は、「日光はもちらん、雨でも、雪でも、風でも、みな身體のためになるから、悪い天氣といふのは實はたゞよい天氣が形をかへたものに過ぎぬ」といつてゐるが、元氣な青年は必ずかう思ふだらう。

今日は、遊の方法も、とりわけ競技のそれなどは大いに進歩して、單に技倆^{テクニカル}や體力ばかりではなく、最も精神を重んじて、競技でりつぱな人格を養成しようといふことに

競技精神を重
んぜよ

なつてゐる。だから、我等もこんな場合には、たゞ勝負ばかりを考へずに、競技者はいふまでもなく、應援者も互によく禮儀を守つて、勝つても負けても、その動作をくづさぬやうに心がけねばならぬ。勝つと誇り、負けると怨んで互に敵を作るやうでは、競技はよい遊でなくなるばかりではなく、青年の修養にはかへつて少からぬ妨となる。きれいな勝負、武士道のいはゆる尋常の勝負、これが競技精神でなければならぬ。

一五 身體のきたへ

身體の健康と
精神の健康

西洋の諺に、「健康な精神は健康な身體に宿る」とあるや

うに、身體がすこやかでないと、精神もふるはぬ。勉強をするのにも、仕事をするのにも、第一に必要なのは健康である。身體も精神も活氣にみちてゐてこそ、始めて意のまゝに働くことができる。

身體の健康を保ち、またこれを進めるのには二つの方法がある。その一つは身體を圓満に發達させることで、これには栄養と運動と攝生の宜しきを得ることが必要である。他の一つは身體をきたへることである。發達はよくても、缺乏や艱難に堪へることのできぬ身體もある。これはおもにきたへが足らぬからである。人の身體は弱いやうでも、一見強さうな獸類などよりも、これを

健康の増進法

きたへの効果

きたへるとかへつて多く抵抗力を増すものである。昔、ギリシャの國に一人の奇人があつて、年中はだかで過してゐた。或日、この奇人がいつものとほり寒中はだかで歩いてゐると、これを見た一人が、「どうしてそんなことができるか」と問うたところ、彼は「あなたはどうして顔だけ寒氣にさらしてゐることができるか」と問ひかへしなほ「私の身體は全部あなたの顔のやうなものである」と答へたさうである。

各種の體操・競技・遊戯などは、みな身體のきたへを助けられるけれども、これらはおもに身體の圓満な發達を目的とするものだから、きたへのためには別に適當な方法をえ

きたへの方法

獸身を成して
後に人心を養
（福澤諭吉）

青年にはむし
る暑・就暑・就寒

無謀な冒險

らばねばならぬ。冷水浴または冷水摩擦を行ふとか、頸卷・手袋の類を用ひぬとか、または旅行・遠足などをして、山を越え河をわたるとかいふやうなことは、よく皮膚・筋肉を強健にするものである。とりわけ暑さ寒さに堪へることは、身體のきたへに最も効果がある。元氣の盛な青年期には、進んで暑さ寒さとたゝかつて見るがよい。避暑・避寒は虛弱な人に必要なことで、健康な青年にはむしろ就暑・就寒の方が身體のきたへになつてよい。

きたへには往々危険が伴ふもので、雪中登山などに伴ふ危険はすなはちその一例である。こんな場合には、前もつてめんみつに準備して、萬が一にも危険におちいら

たほんたうのき

支精神は身體を
配さればね。さればね
ならぬ。さればね
といふやうな隸でなを
ねばいと奴うばげなを
ならぬ。さればね
といふやうな隸でなを

と
トロード、エ
イベリック
のラ学
ジヨンの
ボック

要約

ぬやうにせねばならぬ。たゞ向ふ見ずの冒險をして強がるのは愚なことである。こんな人は臆病と思はれるほど細かに用心して出かける西洋の探險者のことなどを考へて見るがよい。

身體をきたへると同時に、精神をもきたへるのがほんたうのきたへであり、またその一番よいものである。身體をきたへるために精神の發達を妨げ、もしくは精神をきたへるために身體の健康を害してはならぬ。運動にふけつたり、また勉強にこつたりして、一方に偏すると、こんな過におちいることがある。

要するに、きたへは身體と精神をともにすこやかにし

て、實際に役だつりっぱな人格を作りあげるための一つの手段であることを忘れてはならぬ。

一六 清潔

衛生

我が國民は、昔から身體のけがれはやがて心までも悪くするものだと信じて、大いに清潔をたつとんだのにもかゝはらず、今日では歐米諸國にくらべて、清潔の點では必ずしも特にすぐれてゐるとはいへぬ。

國民をして清潔を重んじさせるのには、たゞ國民各自が衛生に注意するばかりではなく、一般にこの氣風が盛

(1) ② 軋拂ヒテヨク拭フテ入	清潔をたつと ぶ我が國民
紙や鉛筆 ノレ	清潔をたつと ぶ氣風を起せ
肩へ肩稍ニヘル ヒテヨク拭フテ入	清潔をたつと ぶ我が國民
其他教室 ヨリナヌ	清潔をたつと ぶ氣風を起せ
各自が進 ニスル	清潔をたつと ぶ我が國民

二、教室ノ 神聖ヲ保ツ 三、クラスノ團體的 精神ヲ強クスル

屈原(周代、楚
詩人の語)

一人の不潔
多くの人を不潔にする
不潔

でなければならぬ。たとへば、きれいに掃除のしてある庭園には、紙屑などでもする氣にはなれぬが、取りちらかした室などに入ると、とかく心がゆるんで、行儀も悪くなる。すべてまはりが清潔だと、そこにある人も自然に自分の身體を清潔にするやうになるばかりではなく、身體を清潔にすると、衣服の不潔が氣になつて来るといふやうに、清潔は清潔をさそひ出し、不潔は不潔をさそひ出すものである。古語に、「新に浴するものは必ずその衣を振ふ。」といふのは、すなはちこの意味である。

だから、またたとへば、我等の一人が不潔をかまはない」と、初はこれを不快に感じた傍の人までが、少しもこれを

要は清潔の實行を以てする集團の力に

氣にせぬやうになつてしまふ。支那の諺にも、「豚を抱くものは、臭きを知らず」といふとほり、不潔になれると、不潔を不潔と感ぜぬやうになる。これに反して、歐米の學校などでは、いかにもよく掃除が行きとゞき、生徒の間にも清潔をたつとぶ氣風が十分にできてゐるから、中には少數の不精者があつても、いつか一般の美風に化せられる。我等も各自に清潔をたつとぶと同時に、この氣風を我等の間に普及させるやうにつとめねばならぬ。まはりが悪くとも、自分だけは善い人になれるけれども、まはりが不潔では、自分ばかり清潔であることはむつかしい。

このやうなわけだから、清潔はつまりは集團の力によ

らないと、徹底的には行はれぬ。一人だけ清潔を好んでも、家族の人々が皆さうでないと、一家は清潔にならぬ。一軒の家だけ清潔にしても、隣近處までが同じくさうしないと、その土地全體が清潔になることは望まれぬ。そして、これが公衆衛生の必要なわけである。ところが、我が國民は個人としては概して清潔を好むのにもかゝはらず、その家や土地になると、かなり不潔にしておくのは、清潔を集團的に行はうとする習慣が、まだよくきてゐないからである。清潔法によつて時々強制されて掃除をするばかりではなく、自分から進んで廣くそのままはりまでも清潔にすることによつて、始めて各自の清潔も保た

清潔論
ル正義理

解

清潔に関する
知識も必要

- 一、目メテ見ミニ
衛生上エイジンジョウ
外ス所マツ
- 二、外ス所マツ
上着アツヂョウ
表裏ヒヤウアソブアソブ、ナニ子コノコ
- ソフリ

清潔ハ立派

ナ道德
的行為

清潔は道德

要約

表裏があつてはならぬから、清潔はりつぱな道德上の行にもなるものである。

要するに、我等は清潔をたつとぶ氣風を起すについては、これを衆とともに實行すると同時に、これに關する正しい理解の必要なことを忘れてはならぬ。

一七 社交

我等は親族朋友以外の世の中の人とも廣く交際せねばならぬ。そして、いろいろの會などで同席するものは、以前から知合ひの人ばかりではないから、こんな場合には、我等の一言一行はいちじるしく人の目をひいて、評判

行會に於ける言

よなふやうにせか
會の目的にせか

になり易いものである。懇意な人ばかりなら、少しはしくじつても、あまりとがめられずすむけれども、初めての人にはこんな容赦^{よさ}は望まれぬから、特にその言行に氣をつけねばならぬ。

およそ會にはそれぐ何かの定まつた目的があるもので、めでたい事のためにするものもあれば、不幸な事のためにするものもあるから、出席者は前もつてその目的を知つて、これにかなふやうに振舞はねばならぬ。めでたい事のためにする會で、不吉な言葉などを口にして、人に不快を感じさせてはならぬ。祝はれる人の幸福をよろこぶ心持をもつてゐることが最も必要である。不幸

な事のためにする會では、特に慎み深い態度を保つて、心から弔意をあらはさねばならぬ。また親睦^{しんぼく}や研究などのためにする會、たとへば、生徒間によく催される茶話會、學藝會などでは、衆とともに楽しむ心持をもつべきで、不平不満をいつたり、一人でわがまゝな振舞をしたりしてはならぬ。また討論でもする時には、おもむろに各自の考を述べて、互に意見を交換するがよい。議論が高じて喧嘩^{けんか}になるやうになることはもちろん、たとひどんな親しい仲の人々の會にても、相當の禮儀を守ることを忘れてはならぬ。

電車や汽車や汽船などの中では、誰^{だれ}彼^{かれ}の區別なく同席

心得
公衆に對する

- 一 勉強モジヨク成績セイセキフ
上ル
一 行々ヨコスル
- 一 服装ヨコスル
- 一 活動ハム行々ヨコスル
- 一 通商ムツウ余ヨリ風儀ブンギ責任ゼンシキに對する
デ等ドエトニカイケナイ

するから、自分を知らぬ人ばかりだと思つて、心をゆるかせにしてはならぬ。もし皆がそんな氣になつて、無遠慮な振舞をしたら、互に迷惑を感じるばかりではなく、その結果、一般に社會の風儀をみだすやうになる。世の中は相持あひもちで、決して一人の都合だけをよくするためにできてはゐないから、自分が人から迷惑をかけられまいと思ふなら、まづ自分が人に迷惑をかけぬやうにせねばならぬ。社會の風儀はたゞ上流の成人だけによつて維持されるものではない。どんな身分・年齢の人でも、これに對して相當の責任をもつてゐる。青年は元氣なのはよいが、元氣にまかせて社會の風儀をこはすやうなことをして

はならぬ。まして我等は他日國民の中堅とならねばならぬから、今から進んでこの責任を負はうとかくごせねばならぬ。昔から旅行家の手になつた紀行などには、途中で見た一人の青年の舉動で、その國の風俗の善惡がわかるといふやうなことがよく見えてゐる。

一八 孝道

親の愛

深くまた純な

世の中にも思ふ
子を戀する
思ふる思にまさ
る思なきか
る思(紀貫之)

る親は子を教へ

子もまた同じくこれを愛する。とりわけ病身な子に対する親の心は最も親切をきはめ、その心では、子とともに病に臥し、子とともに薬を飲んでゐるといつてよいほどだから、親にとつては、子の病はたしかに自分自身の病よりも一そく苦痛に感じられるものである。だから、孔子は門人が孝道について問うたのに答へて、「父母はたゞその疾やまいをこれ憂ふ。」といつて、特に子の病氣の場合の親の心を引いて孝を説いたぐらゐである。

世には、往々親は子を養ふもので、子を教へるのは先生であるやうに考へてゐるものがあるが、この考は大いに誤つてゐる。親は子を養ふばかりではなく、また子を教

へるものである。しかもこの教は人の生れるすぐその時から始まつて、最も深い印象インプレッショを後まで残すものである。そして、その中最も大切なものは愛の教である。まだ何事も一人でできぬ人生の初期に於て、母が自分のことは一さい忘れて我等を愛してくれる深いくいつくしみの心が、我等の愛の心をはぐくませるのである。スマイルスは、その「自助論」の中に、社會事業家として名高いフォン・エル、ボックストンといふ人が、その母に書をおくつて、「私は平生、とりわけ人のために力をつくす場合には、これは皆母君が私の幼時に私の心に植ゑつけて下さつた結果だと感じてゐます。」といつた言葉を引いて、母が身をも

つて幼兒を教へるそのことが、どんなによく人の愛の心を養ふものであるかを説いてゐる。

親の子に對する愛は慈であつて、子の親に對する愛は孝である。慈と孝は常に相對して、親と子の間に自然に起る人情であつて、道徳の教が始まつてから後、特別にこの人情が養成されたのではない。こんな次第だから、人情の失はれぬかぎりは、子の孝も親の慈と同じやうに必ずいつも人の心に存してゐるものである。世に不孝の子といはれるものでも、實は孝心がないのではなく、多くは親の慈愛になれて、一時その本心に遠ざかつたまでである。こんなに、親の慈も子の孝とともに人情の自然に

基づくものだから、またその自然の發達を妨げぬやうに注意せねばならぬ。或は時としては、たとひ親のいふことに無理があると思つても、自分はこれまでどれほど親に對して無理をいつたかをかへりみて、よくしんばうせねばならぬ。

親は子に對して恩をかへしてもらふ考はないが、子はできるかぎりの力をつくして、そのかぎりのない大きな恩に報いる心がけをもつてゐなければならぬ。昔から一飯の恩にさへ厚く報いるのが人の人たる道とされてゐる。だから、親の恩に報いるのは、單に子としてつくさねばならぬ義務であるばかりではなく、實に人としてつ

西洋も孝を重んじる

イギリスの大文豪

くさねばならぬ最も大きな義務である。或は西洋などではさほど孝道を重んぜぬと思つてゐる人があるやうだけれども、その實はなかくさうではない。シェークスピアは、「不孝な子はまむしの毒牙にもましておそるべきにくむべきものだ。」といつてゐる。

孔子はさらに一步を進めて、「孝は徳の本なり。」といつて、これを人の最上の道德と見、そして、孝は親の身を養ふよりも、その心を養ふことを主とせねばならぬと説いてゐる。それなら、親の心を養ふのにはどうしたらよいのかといふに、親は何よりも子の健康をこひねがふものだから、その心を慰めるのには、子は第一に平生衛生に注意して、

身體を父體髮膚に受かれて
孝は父母の傷に受けざる
(孝經)

身を立てる道を後世を
名揚げ、父母を顯す
(孝經)

返金と
ちがふ
報恩は

常に健康な身體を見せねばならぬ。子の壯健な血色、快活な舉動を見ることは、親にとつてはまことにこの上もない樂みである。次に、親は切に子の學業の進歩をこひねがふものだから、健康な身體とともに、よい成績をも示すことができたら、孝道はその半ばをつくしたといつてもよい。最後に、親の最も望むことは子の立身出世だから、よくこの心を推しあかつて、他日りつぱな國民として恥かしくない行のできるやうに、今から十分これを心がけねばならぬ。

しかし、極めて深いまた極めて純な親の心に對しては、孝道はたゞその子に對する希望を満足させることだけ

け愛と敬をさ、

にとゞまつてはならぬ。まして報恩を返金と同様に見るやうな心がけは、こんな無限の恩を施して、しかも何等の返報をも求めぬ親の心に對しては、あまりにいやしい勘定づくめなものである。子としてはよろしく無限の愛と敬をさゝげて、力の及ぶ限りよく親につかへるべきである。孔子の言に、「今孝はこれよく養ふことをいふ。犬馬に至るまで皆よく養ふあり。敬せんば何を以て別たんや。」とあるのは、孝道に一だん高い品位と一そう深い意味とを與へたもので、實に我等のとりわけ注意して服膺すべき教訓である。

一九 兄弟姉妹

我等にとつて最も大切な父子・君臣・夫婦・長幼・朋友の五倫の中で、最も自然で、また最も親密な關係のあるものは親子で、これに次ぐものは兄弟姉妹である。親子・兄弟姉妹はいはゆる骨肉の親で、その間には切つても切れぬ關係がある。兄弟姉妹はともに同じ親の血を分けて、その面影や心持をつたへてゐるから、またこれを同氣ともいふ。互に他の身に於て自分の最も愛する父母を見るばかりではなく、自分自身をも見、しかもまた兄姉に於て自分の將來をおもひやり、弟妹に於て自分の過去をおもひ起すものである。ところが、他人に對しては、たとひこれ

をどんなに親愛してゐても、こんな微妙な精神的關係は生じない。そして、これが兄弟姉妹の關係の一種特別なものであるゆゑんである。

幼時の追憶

うもれ
どたら
のどか
のぞま
にあ
懸
しむ
せしら
りけ
るぞま
にあ
(松平定信)

兄弟姉妹は年が長じておのゝその志す業に従ひ、或は他家に嫁してその住居を別にするやうになつても、互に他の身の上をあんじあふもので、とりわけかつて父母の膝下でたはむれ、ともに手をとつて學校にかよつた昔を思ひ出すと、そのなつかしさに堪へぬものである。そして、をりく、逢つて、互に昔を物語つたり今を話したりする時の樂みにまさる樂みは、おそらく他にはなからう。喜も憂も心からこれをともにしてくれるものは兄弟姉妹である。

友愛は孝道

妹で、何かの事業でも起す場合に最も信をおかれるものもまた兄弟姉妹である。

兄弟姉妹は親から見るとみな同じ最愛の子だから、兄姉が弟妹を愛し、弟妹が兄姉を敬するのは、父母の心を慰め、父母に孝をつくすわけになる。ところが、諺にも「兄弟は他人の始まり」といふやうに、人倫の關係は兄弟姉妹から疎遠になり始めることが少くない。その原因はおもに互に親しみ過ぎてわがまゝになるからである。兄姉は兄姉らしく、弟妹は弟妹らしく振舞ひさへすると、いまはしい兄弟喧嘩などは起らずにすむものである。兄姉の恥は弟妹の恥、弟妹の損は兄姉の損であつて、しかもそ

べてすれ同骨肉難を構へ
き獨り棄ばに戈を構へ
く張揚園理全從はるつ必操へ
の儒考清

國家のありが
たさ

の結果はひいてわづらひを父母に及ぼし、遂には一家一門の不幸をまねくやうになるから、兄弟姉妹はどんな場合にも互に親しみあひ信じあひ助けあはねばならぬ。

二〇 國家の恩

人の生活に缺くことのできぬものは數かぎりなくあるが、その中でも、空氣や水は最も必要なものである。しかし、空氣や水はこれを得ることが容易だから、世人は平生ほとんどそのありがたさを忘れてゐる。國家の國民に對する關係は、いくらかこの空氣や水と人の生活との關係に似た點がある。我等がかうして安全にその日そ

の日を送つて、無事に勉強することができるのは、國家があるからである。國家に軍備があり、法律があり、また警察などがあつて、社會の秩序を維持し、我等の生命・財産を保護してくれるからである。だから、我等にとつては國家ほど大切なものはない。試にこれらものものない場合を想像し、またはその不完全だつた時代の有様をかへりみると、いまさらのやうに國家の恩の至つて大きいことがわかるだらう。ところが、我等はもとく國家の内に生れて、常にこれに保護されてゐるところから、いつの間にかその恩になれて、とかくそのありがたさを忘れることが多い。

我等は平生國籍のことなどは少しも心にかけてゐないが、一旦その必要の生じた場合に、名のることのできる國籍をもつてゐないと、たとへば國內で戸籍不明のものが人に相手にされないと同様に、悲しい思をせねばならぬ。しかし、國籍はその屬する國家のいかんによつて、その權威に非常な差がある。貧弱國・未開國に籍をもつてゐる國民は、自然に肩身も狭く感じるが、富強國・文明國にこれをもつてる國民は、自信も強く、また他からも大いに尊重されるものである。

だから、人の幸福の一つは强大國の民となることである。個人としてどんなにすぐれてゐても、貧弱國に生れ

るかもしくは亡國の民となると、十分にその權利を保護してくれるものがいいから、憂目に逢つても訴へるところがなく、たゞ恨をいだいて身の不運を嘆くより外はない。この種の例は外國の歴史には多く見られるが、我が國民はまだそんなあさましい経験をなめたことがないばかりではなく、二千五百有餘年來、萬世一系ゆるぎのない皇室のありがたい保護の下に、光榮のある生活をつづけて來た。特に明治維新以後は、英邁絶倫な明治天皇の御統治によつて、諸般の文物・制度が完備し、さらに大正天皇がよく明治天皇の御遺志を繼がせ給うたので、我が國は東洋の一小島國から、一躍して世界五大強國の列に加

較他國民との比

はり、今はまた昭和の新時代に、春秋に富ませ給ふ今上陛下の進歩的な御統治の下に、我が國運は日に月にますます隆昌に向つてゐる。かうして、我が國民は國家の恩澤を受ける點では、世界中のどの國民にも優りはしても決して劣りはせぬ。

およそ人の幸不幸は、他の運命と比較して見て始めてよくわかるものである。世界大戦に敗れてその跡始末に苦しんでゐる諸國民の困難や、支那の國民のやうに内亂のためにたえず不安な日を送つてゐる有様などを思ふと、日本國民である我等の幸福がどんなに大きいかがわかるではないか。今や日本國民といふ肩書は、我等を

して世界のどの國民に對しても、非常に肩身を廣く感じさせるのである。これを考へると、平生國家の恩になれてゐるものでも、さすがに盡忠報國の心を奮ひ起さずにはゐられぬだらう。

制新中學修身教本 卷一終

立志と勉強

追録

本文の處々について、多少その所説を深め、もしくはこれを廣めて、餘力のある生徒の自學自習の用に供へる。

二 立志

儒教などていふ立志とは、聖賢の道に志を立てる事で、何か定まつた身分の人にならうと決心することではない。たとひ自分はどんな身分の人がすきだから將來はそれになつて見たいと願つても、これは自分の勝手になるものではない。だから、我等の立志は、やはりたゞ正しい賢い人にならう、人一倍勉強して人にすぐれた人物にならうといふやうな點にあらねばならぬ。これなら自分がだけのことだから、その人相當に希望は必ず達しられる。誰でも大臣・大將になれることもないが、また必

ずなれるときまつてもゐない。だから、我等はたゞ何になるのにも必ずなくてはならぬ準備をすればよい。青年時代にはとりわけ空想と立志をはきちがへぬやうに氣をつけねばならぬ。

○十有三春秋、逝く者はすでに水の如し。天地は始終なく、人生は生死あり。安んぞ古人に類して、千載青史に列するを得ん。(頬山陽)

○少年は老い易く、學は成り難し。一寸の光陰輕んすべからず。未だ覺めず池塘春草の夢。階前の梧葉すでに秋聲。(朱熹)

宋の儒者

三 進んで取れ

○馬を川端に連れて行くまでは人の力だが、水を飲むか飲まぬかは馬自身のことである。(西諺)

生徒心得

四 紀律と規則

どの中學校の生徒心得を見ても、すでに小學校でねんごろに教へられたことを書き列ねてあるものが多い。だから、もしこれがなくてはならぬものとすると、生徒は小學校ではたゞうはのそらに先生の教を聞いたことになる。そればかりではなく、これから後も同じことをまた幾度くりかへさねばならぬかも知れぬ。それでは紀律の習慣はいつまでもできぬわけだから、我等の方で、自分から進んでこんな生徒心得などの必要のないやうにせねばならぬ。悪いと知れてゐることは、誰の注意がなくても、一人でもこれをおかさぬことになると、この目的はいつもそくざに達しられる。生徒一同の決心がこゝまで進むと、こゝに始めて紀律にかけては理想的な學校が成立つ。生徒心得をよく守る生徒も感心だけれども、生徒心得がなくてもそれ

に合ふやうな行をする生徒は更に一そく稱揚すべきである。この紀律的生活は最もよく文明國に發達して、しかもその發達はほとんど文化の程度と並行するやうである。支那人や印度人にくらべると、まだ我が國民はよほど紀律的だけれども、歐米の諸國民には遠く及ばぬ。もつとも我が軍隊の紀律の正しいのは世界に誇るに足るけれども、それが軍隊にある間だけで、軍隊を離れると紀律が立たないやうでは、ほんたうに紀律的生活をなすものとはいはれぬ。そして、紀律の點でまだ甚だ遺憾の少くないことは、我が國民が電車・汽車などの乗り降りの際に示す舉動によつてもよく知られる。概していふと、我が國では紀律はたゞ命令の行はれる處だけに保たれて、それ以外、自由行動を許されてゐる場所で、自分から進んで紀律を守る例はめつたに見られぬ。ところが、西洋諸國では、たとへば、街上の往來にでも

見ず知らずの人が互に歩調を合せて行くといふほど紀律的習慣ができてゐる。觀物場などの入場に當つて、どんなに待たせられても、一人の抜駆ぬけを試みるものはないのが常である。これは些細なことのやうでも、これでその國の文化の程度の優劣が見分けられるから、決してこれを輕々に看過みすきしてはならぬ。

五 友だち

昔は門を同じうするものを朋といひ、志を同じうするものを友といつたけれども、友だちの意味は今日ではよほど廣くなつた。最も廣い意味では四海同胞などといつて、人類は皆互に友だちだと見る。たとひそれほどではなくとも、今日の友だちは國の内外にわたつてゐる。だから、誰とでも餘りみだりに交るのはよくないけれども、友だちといふと同學・同郷などの人に限

ると思うてはならぬ。おひく年が長ずるに従つては、一郷の士から一國の士、一國の士から天下の士といふあんばいに、ますますその交際の範圍をひろめて行かねばならぬ。さうでないと、友だちから得られるべき利益も十分に得られぬ。そればかりではなく、いつまでも狭い範圍の人とだけ交つてると、自然固陋褊狹な人物になつてしまふ。とりわけ學問・藝術に従事する専門家などは、國境を限つて友だちを擇んではならぬ。現にこの方面の人の中には、世界的に交際してゐるもののが我が國にも少くない。

- 賢い人は愚かな人から學ぶが、愚かな人は賢い人から學ばぬ。(西諺)
○よしあしとうつる鏡の影法師、よくく見れば我が姿なり。(道歌)

六 言葉

正しい言葉

我が國の教育は昔から話すことより讀むことを重んじた結果だらう、今でも、話すことにはまちがひがあつても、これをきびしく正さうとせぬ。我等の日常の交際などでは、たいてい半端な言葉でもつて用を辨じてゐる。「行かないか。」「行かう。」ぐらゐですましてゐるけれども、これを文章に書くと、何のことかさつぱりわからぬことが多い。正しい言葉はこれを文章に書いてもよくわかるものでなければならぬ。外國人は、子供の頃から、ふだんでも文法ちがひの言葉を用ひると、ちやうど不作法でもしたかのやうに兩親に叱られるから、自然その言葉が整つてゐる。我が國では目に見える行儀はやかましくいつても、耳で聞く言葉はさほどやかましくいはぬ。お辭儀・お世辭だけは案外發達してゐても、語法・文法のともに正しい言葉で話す習慣がよ

方言・訛言

く養はれてゐないのは、恐らくそのためではないかと思はれる。とりわけ近時青年同志の言葉にはすこぶる野卑亂暴なものが多い。平生こんな言葉に慣れてゐると、いざ禮儀を尙ぶまじめな場合などになると、おぢ氣がついて、何もいふことができないで、大いに面目を失ふものである。また田舎の風俗は粗野だといつて、都會の流行に従つてこれを改めようとする人の多い割合には、方言・訛言を正さうとする人の少いのは、まことに事の本末輕重を誤つたことである。田舎の質樸な風俗にはむしろ保存した方がよいものが多いけれども、方言・訛言はいたる處でその人に直接不利益をもたらすから、この方こそなるだけ早く改めねばならぬ。ところが、最新流行の服裝をしたハイカラ青年には、言葉だけは依然お國訛をそのまま用ひてゐるものが多い。これは傍から見てもいかにも氣の毒である。そればかりでは

なく、こんな人は外國語を學んでも、その音調がどうしてもその地方的になつて、英語にも鹿兒島英語・青森英語があるといはれるくるゐである。

なるたけ互に顔をあはして、心と心の交感を盛にするのは、社交の第一要件だけれども、そのあらはしやうの如何では、却つて互の感情を害して反対の結果をもたらすから、交際好きのアメリカ人などは、學校で特に談話術のけいこをしてゐる。これも必要でないとはいはれないが、實際はまじめな用談にさへ正しい言葉を用ひ得ないやうな人でも、社交上では無口で失敗するよりも饒舌で失敗する方が多くるだから、談話術などを学ぶよりも、正しい言葉で話す練習をすることを先にするのが當然の順序だらう。たとひ上手には話せなくても、せめて正しく話すことができたら、それでまづもつて満足してもよい。

「わたくし」と
「あなた」と

我が國ほど第一人稱・第二人稱にいろいろな言葉を用ひると
ころはない。どこでも第一人稱は「わたくし」、第二人稱は「あなた」
だが、我が國では、第一人稱には、「わたくし」の外、僕・我輩・自分・拙者など、第二人稱には、「あなた」の外、君・貴君・貴様・お前など、人によつてめ
いめいかつてな言葉を用ひるのは、いかにも亂雑で見ぐるしい。
これは統一するがよいけれども、さしあたり我等の場合では、「わ
たくし」と「あなた」をおもに用ひるがよい。時としては目上の人
に對して「僕が云々」といふ生徒のあるのは聞きぐるしい。これ
は「君・僕」といつて同等の交際に用ひるべきものである。

相手が誰だらうと、談話に生かじりの外國語を挿んでハイカラ
がるのは甚だ無禮である。そればかりではなく、近頃のやう
に、英語はもう古いからといつて、ドイツ語やフランス語まで知
つたふりをするのは、他から見るといかにも軽薄に思はれるか

ら、大いに戒めるべきである。

- 人を傷くるに言を以てするは劔戟よりも甚し。(荀子)
- 慎つしをおのが心の根と知らば、言葉の花も見事にぞ咲く。(道歌)
- 病は口より入り、禍は口より出づ。(支那の諺)

七 仕事はそくざに

諺にいふ書はいそげ。「思ひ立つ日が吉日」などと同じ思想は、東西どの國にもある。儒教では最もこれを重んじ、進徳・修業には「速か」といふことほど貴いものはないと論じ、孟子が宋の大夫に、其の義に非ざるを知らば、こゝに速かに已めよ、何ぞ來年を待たん。といった言葉は、我が國でもよく引用され、林羅山が門弟のために大晦日から「通鑑綱目」の講義を始めた話などは、この言葉

を実行した例として名高い。西洋には昔から「早速の着手は半分の成功」といふ格言がある。

○古人も、時を偷むの損は財を偷まるゝよりもはなはだし。財はふたゝび積むことありとも、時はふたゝび得べからずといへり。もし今日はかかるさはりあり、明日よりなどと思ふこゝろできば、大敵内におこると知つて、みづからいましめこらすべし。(井澤蟠龍、武士男子訓)

○明日ありと思ふ心の仇櫻、夜半に嵐の吹かぬものかは。(古歌)

○明日ありと思ふ心の仇櫻、嵐なくとも花は散るもの。(三宮尊徳)

八 何事にも熟練

者 フランスの學

○道德と藝術では實行がすべてで、言葉は零である。(ルナン)

○習ふよりも慣れよ。(邦諺)

九 忍耐と困難

忍耐には自分の感情を抑へることが主となるから、たとへば、人を憎いと思ふ感情を抑へると、反対に人を愛するといふ感情が生ずるけれども、人を憐れと思ふ感情を抑へると、その結果は冷たい心の人となる。幼少の時から餘り苦勞した人に、どうかすると冷酷な人の少くないのは、すなはちその一例である。だから、忍耐は悪い方へ向ふと、一轉して殘忍といふ惡徳に陥ることがある。忍耐の徳を養はうとするものは、同時にこの點にもよく氣をつけねばならぬ。

○錦にもあやにもあらで堪忍の袋は見ても見事なりけり。(道歌)

二 勉強のしかた

○およそ書を讀むには、いそがしく早く讀むべからず。ゆるやかにこれを讀みて、字々句々分明なるべし。一字をも誤るべからず。必ず心到り眼到り口到るべし。この三到の中、心到を先とす。心こゝに在らざれば見れども見えず。心到らずしては、みだりに口に讀めどもおぼえず。またにはかにしひて諸に讀みおぼえても、久しきを歷ればわする。たゞ心をとめて遍數をかぞへて熟讀すべし。一書熟して後また一書を讀むべし。心をたゞしくし、行儀をつゝしみ、みだりに言はず、笑はず、志を學に專一にすべし。常に暇ををしみて、用もなきにいたづらに隙を費すべからず。(貞原益軒、和俗童子訓)

一二 自助

必要もないのに多くの人手を勞するのを、自分のえらさを示すわけだと心得るのは、野蠻未開の遺風である。舊劇などによく見られる殿様が數多の従者にかしづかれ、煙草一服さへ人に

人の人格を認

火をつけてもらうのを見ると、その次第がよくわからう。ところが、この陋しむべき遺風を却つて高尙なことと思つて、今日でもその眞似をするものが、とりわけいはゆる成金の徒に多く、自分を御前などと呼ばせて喜んでゐるのは、まことに笑ふべきことである。自分自身を尊いものにしたいものは、まづ第一に人の人格を認めることができねばならぬ。

一三 心持を快活に

○心體光明なれば暗室の中に青天あり。念頭暗昧なれば白日の下に厲鬼を生す。(菜根譚)

一四 よく遊べ

競技精神

誠明の著者
洪自

フューヤ、プレイなどと外國語でいふと、人がいかにも事新しく思つて感心するけれども、この思想は我が國の武士道でこそ最もよく發達したもので、今でも剣道・柔道の試合ではよく禮儀が守られて、いつさい不作法な振舞が見られぬのは、それに武士道の精神が重んじられるからである。だから、一般の競技にもこの精神が本となりさへしたら、今日の競技に伴ふ卑怯未練な弊風は自然に改まるはずである。或時、イギリスの某處で催された運動會のやじ騒ぎで警察署に引致された數十名の青年に向つて、警官が「貴君たちはスポーツマンか。」と問うたところ、青年たちは「さうだ。」と答へたので、警官はすぐに「それなら、貴君たちの責任を見逃すわけにゆかぬ。」といつて、一同を普通以上の罰金に處したさうである。これは、我が國の昔でも、武士に對しては商人・百姓などよりも一段重い責任を負はせたのと同一の趣旨である。

要するに、スポーツマンは普通人以上に紳士的であらねばならぬといふのが、東西古今に通じて行はれた思想である。だから、スポーツにこつたためにその人格を損じたといふものが、もあるとしたら、それはまだほんたうのスポーツが世に行はれてゐないしようこである。

大正十一年十一月五日、今上陛下がまだ皇太子殿下でいらっしゃれた時、大日本體育協會の催にかかる競技大會に台臨あらせられた節に下したまうた令旨を次に掲げよう。

運動競技ガ身體精神ノ陶冶ニ重大ノ關係アルハ言フヲ俟タズ近來此種ノ會合益隆盛ヲ致シ多數ノ青年一場ニ會合シ禮讓ヲ重ジ氣節ヲ尚ビ相和シテ技ヲ競フハ悅ブベキコトナリ余ハ本協會ノ青年ガ技術ノ進歩ニ努ムルト共ニ一層修養練磨シテ運動競技ノ精華ヲ發揚セムコトヲ望ム

一六 清潔

衛生

公衆衛生思想の發達してゐるかゐないかは、衛生施設の整否の外、國民が傳染病の害毒などをどのくらい恐れてゐるか、その程度を考へないとわからぬ。學校から品行を誤つた生徒が二三人出たといふと、世間では大騒をするけれども、學校に傳染病が侵入したといつても、さほどの問題にせぬのが、今日の我が國の常態だとすると、我が國民の公衆衛生思想はまだ幼稚だといはねばならぬ。西洋諸國ではもうその黴菌^{けいきん}が種切で研究に困つてゐる赤痢・腸チブスなどが、我が國では現にほとんど年中行事のやうに流行して、これを一舉に根絶し得ないのは文明國の體面を傷けるものである。一人の不注意が原因で莫大な國費をむだにし、幾萬幾十萬の人命を奪ふことさへあることを思

ふと、我等は十分に衛生思想の養成につとめるべきである。

一八 孝道

○君は君たらざるも、臣は臣たらざるべからず。父は父たらざるも、子は子たらざるべからず。(孔安國)

二〇 國家の恩

我が國民が、建國以來足利時代の末のいはゆる戰國時代を除く外は、ほとんど兵亂の慘状を知らないのは、實に世界に類例のない幸福だといつてよい。西洋諸國の歴史を見ても、また支那の歴史を見ても、國民はたえず戦争のために苦しめられてゐる。支那などは不人情極まる掠奪・殺戮^{りょうだつ}が、何千年前の昔から今日まで引きつゞいて行はれてゐる。だから、支那の學者などの言葉

國家の隆昌を
はかる

杜甫(唐の詩)
人の詩の句

には、よく生れて太平の世に逢ふことを無上の幸福と感ずるといふことが述べてある。ところが、我等はこんなことを當り前のやうに思つてゐるのは、他の國民には或は恩になれ過ぎてゐると見えるかも知れぬ。

革命の慘事のいかに氣の毒なものであるかは、かつては世界に畏懼されたロシヤ人が、今は羅紗賣に身を落して、遠い我が國にまで流れ来て、みじめなその日々を木賃宿で送つてゐるのを見てもわからう。國が亡びるといふのは、いはゆる「國破れて山河在り」で、國土がなくなることではなく、國民が人として取扱はれぬことだから、亡國などといふ不祥な運命に逢ふまいと思ふなら、國民各自が國家を輕視するやうな邪説に迷はされず、ますます奮つてその隆昌をはかる外はない。



□本教修身學中制新□

大正十一年十月廿三日印
大正十二年一月四日訂正再版印刷
大正十三年十月廿七日修正三版印刷
大正十四年一月一日訂正四版印刷
昭和二年八月廿四日修正五版印刷
昭和三年一月十三日訂正六版印刷

著作者

湯 原 一

大正十一年十月廿六日發
大正十二年一月七日訂正再版發行
大正十三年十月三十日修正三版發行
大正十四年一月四日訂正四版發行
昭和二年八月廿七日修正五版發行
昭和三年一月十六日訂正六版發行

發行者

東京市小石川區小向水道町八十四番地

株式會社 東京開成館

代表者 松本繁吉

印刷者

東京市牛込區榎町七番地

竹内喜太郎

發行所

東京市小石川區小向水道町八十四番地

株式會社 東京開成館
〔振替貯金口座〕 東京第五三二二番

錢四拾參金 三卷 錢壹拾參金 二卷 錢九拾貳金 一卷
錢八拾參金 五卷 錢六拾參金 四卷

刷印社會式株刷印清日
昭和四年度版特定價
金四拾八錢

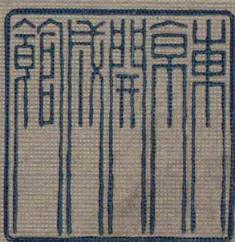
中華書局影印

卷一

卷一
大抵
本義
論著
之言
其一
卷一

方略

二卷



第一回

土井 政行

広島大学図書

2000044018

